ＩＳ《思い》

橘　充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ《思い》

【Ｎコード】
Ｎ０９９０Ｗ

【作者名】
橘　充

【あらすじ】
少年楓はトラックに轢かれそうな少女を助け死んでしまう。
だが神様に第２の人生を与えられる。違う世界で。
彼が来たのはＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の世界だった。
いわゆる転生ものです。苦手な人は控えてください。

1話（前書き）

今回が二作目です。
どうぞっす。

1話

どうしたんだろ俺…死ぬなんて…

俺の目の前に少女が大型のトラックに轢かれそうになっている。
少女は気がついていない。
今なら十分間に合う。
だが周りの大人は助けない。
やなのか？自分が巻き込まれるのが。
「ちっ」
こんなの目の前にしたら助けるしかないだろ。
「うおおおおお」
叫びながらその場所まで走る。
少女の方を掴んで後ろに思いっきり引っ張る。
「あ…」
少女を轢かれない所までやったはいいが俺が轢かれそうだ。
ガシンッ
鈍い音をたてながら俺は飛んだ。

それで今俺がいるのは見知らぬ草原。
「貴方はいい人ですね。自分の命を顧みず少女を助けるなんて」
ふと誰かに声をかけられた。
「貴女は…」
ぱっと見は教会の絵の女神様だった。
「私はここの神。貴方の命を生き返らせてあげようと思って」

「え…」
「貴方は少女を助けて亡くなった。何故貴方は少女を助けた？」
「簡単ですよ。俺もとある男の人に同じように助けられた」
「そうなんですか？」
「えぇ。彼も俺をかばって死んだ。そのせいなのか反射的に体が動いたそれだけです」
「貴方は、それで死んでしまって良かったんですか？」
「元々この命は助けてもらった時から人を助けるためにあるような物ですし」
「……決めました。貴方には第２の人生を与えよう」
　イマナンテ？
「私の勝手ながら、とある世界で第二の人生を歩んでもらいます」
「勝手ですね。神様」
「えぇ。貴方は夢がありますか？」
「はい」
　いくつかはあるが一番は…
「自由に空を飛んでみたい」
「そうですか。貴方のお名前は？」
「橘　楓」
「ありがとうございます。ちょっとしたサプライズを入れて生き返らせます」
「神様すこし洒落てますね」
「最近下界でよくあるようですし」
　いい神様だ。今度から神社になるべく行くようにしよう。
「もう会う事はないでしょう。でも私を恨まないでくださいよ？」
「こんないい神様恨みませんよ」
「では　転生　３，２，１」
　その直後視界が白くなっていく。

意識を取り戻すと公園の端に首からプレート掛けてにいた。
『恨まないでくださいよ？』ってこうゆう事か。
ん？こちらに学生が来る。
「『この子の名前は《楓》です拾ってください（5歳　9月27日）
』か…」
誰だろう？
その人は俺を持ち上げて
「よし帰ろう」
と言った。
「あなたは…」
「私か？私は織村千冬…今日からお前の家族だ」
織村？
「さあ行こうか楓」
その言葉を言われた時何故か心が軽くなった。

1話（後書き）

誤字・脱字があったら指摘をお願いします。

2話（前書き）

2話です。

2話

今俺は織村の家に行っている途中だ。
今だ持ち上げられている。
歩く事7分。
とある一軒の家の前に着いた。
「楓ついたぞ。ここがお前の新しい家だ」
どうやら織村さんの家のようだ。
ガチャ。
「一夏。千夏。帰ってきたぞ」
「「お帰り。千冬姉」」
ここでやっと降ろされる。
「お前たち今日から新しい家族だ」
「ど、どうも。橘楓です」
一夏がお辞儀をしてきた。
俺もあわててお辞儀をする。
「楓。今日からお前は織村楓だ」
「は、はい」
「取りあえず、風呂入ってこい」
「わかりました」
何だか織村さんは不思議そうな顔をする。

織村さんに連れられて風呂場へ。
「1人で入れるか楓？」
「はい。織村さん」
「丁寧なのは良いが私の事は姉さんとでも呼んでくれ」
「はい。姉さん」

そうして千冬さんはリビングへ行った。
服を脱いでいくと重要な事に気がついた。
男にあるべき物がない。
え…まさか女になってる？
まあ取りあえず風呂へ
体を洗って湯船に入った。
でかく感じた。
「まあ当たり前か」
その後頭を洗っていたのだが髪が長いと洗いずらいとゆうことが分かった。
また湯船に浸かってっからでる。
「さっぱりしたか？」
姉さんのようだ。
「はい」
「あの…服は…」
おそらくは洗濯中のようだ。
「取りあえず千夏のを着てくれ」
「はい」
奇跡的にピッタリ。
「よし。晩飯を食べるぞ」
「はい。姉さん」

2話（後書き）

一夏は知ってのと通り男。
千夏はオリキャラで女。
二人は双子と言う設定

3話（前書き）

では、三話で～す。

3話

１５歳夏。年齢的に高一。
「かっちゃん～。そこのケーブル取って」
「はい。束さん」
今頃どう年代の奴らは青春を楽しんでいるだろう。
だが私は束さんのもとで助手をやっている。
「いや～まさかいっくんがＩＳ動かしちゃうなんて」
どうせ束さんの企みだろう。
「話はちょっと変わるんだけど…」
「どうしたんですか？」
「ＩＳ学園行かない？かっちゃん」
「へっ？」
今なんと？
「いや～。かっちゃんがやっと女の子らしくなったからさ」
何故そうなる。
取りあえず姉さん直伝『アイアンクロー』
「いた、痛いよ。かっちゃん。ちーちゃんなみに痛いよ」
どうもこれをやったら握力が上がった。
放す。
「あ～痛かったよ。天才束さんの脳が圧縮されちゃったよ」
「良いじゃないですか。小顔になって」
「やっぱかっちゃんあったまい～。私が唯一コアの作り方を教えて理解できただけの事はだけの事はあるね」
ちなみにガチで教えてもらいました。コアの作り方。
そのおかげで専用機（束さんが作った色んな物がある）ができた。
「それで行っとく？箒ちゃんやいっくんやなっちゃんにあえるよ？」
「ん～じゃあ行きます」
「一つお願いなんだけど」

「何ですか？」
「学園生活楽しんでね」
「言われなくてもそんの位勝手にやるつもりですよ」
「じゃあ。箒ちゃん。ちーちゃん。いっくん。なっちゃんによろしくね」
「わかりました」
あ…
「束さん食生活には気をつけてくださいよ？」
「わかった～。今度手料理を作ってねかっちゃん」
「それでは行ってきます」
そうして現ラボ（アメリカ）を飛び出した。
1年ぶりに家族にあえる。
テンションが妙に上がっていた。

3話（後書き）

誤字・脱字があったら指摘をお願いします。

途中ですが主人公設定

織斑　楓　・女・

（橘　楓）

・１５歳
・９月２７日生まれ
・身長　１５６ｃｍ
・体重　秘密

・好きな物
家族　トウモロコシ　刺身
甘すぎない甘い物。

・嫌いな物
かぼちゃ　なれなれしい人

・異世界からの転生者。元男。
・頭はよく運動神経も抜群。
・中２の二学期の終わりに束の元でＩＳについて勉強。
・世界に二人しかいないＩＳのコアを作れる人。
・中学校では学年主席。
・案外影が薄い。だがきれると千冬でもとめる事ができない。

（俺口調になる）
・容姿は腰の辺りまで、赤に近いオレンジの髪がある。
だが束と一緒にいる時にうっかり、事件を起こしてしまい黒い首のたりまである。
（束特製）
後は伊達ネガネをつけており。切れるとすごく怖い。

・楓特製量産型ＩＳ「紅夜」
・主に中距離射撃を行う。
・接近戦では刀を使う事も可能。
・量産型と言っても今はまだ５機しかない。
武器
『ランサー９２Ｍ』
ハンドガンでであり、実弾とエネルギー弾が使い分ける事ができる。
『村雨』
接近戦専用の刀。特にない相手に打撃を与えるためにある。

・楓の専用機『白夜』
今の所は謎…

途中ですが主人公設定（後書き）

どうですか？

ＰＳ・一、二話の織斑が織村になっていましたす。みません。

4話（前書き）

ついに学園編です。

4話

7月の始め私はＩＳ学園の門の前にいた。
いざ受付へ。
８分後。
「ん～これは…」
恥ずかしい高校一年にもなって迷子。
近くに人がいないかを探す。
「おっ」
運良く人がいた。
鈴だ。
ＩＳ学園の生徒だったのか
「お～い。リーん」
すこし大きい声で呼んでみる。
「！」
走って駆け寄る。
「あの…不法侵入者ですか？」
ズゴ。
「いったー何すんのよ不法侵入者」
「鈴。私を忘れたのか？幼馴染を」
「えっ。まさか…楓！」
「正解。好きな男の姉ぐらい覚えとけよ」
「な、なんてことをいきなり言うのよ」
「いいじゃん別に。それより久しぶり」
最初に会ったのが鈴でよかった。
「久しぶり」
「とゆうか何で私を不法侵入者とか言ったの？」
「あんたが変わりすぎたからよ」
「そうか？うっすら変わったぐらいだよ」

「いや変わりすぎ」
そうなのか？
「鈴。そんな事より受付を教えてくれ」
「いいわよ。ここの先を右に曲がればつくわよ」
「ありがとう鈴。この事は一夏には言わないでね。驚かせたいから」
「わかった」
そう言って受付に行く。

「あなたが織斑楓さんね」
「はい」
その後書類を何枚か書き終わる。
「あなたは3組ね」
「はい分かりました。一夏って何組ですか？」
「1組よ。それにしてもあの子凄いわね」
「そうなんですか？」
「えぇ。代表候補生を倒しちゃうんだから」
へ～えらくなったもんだ。あのバカが。
「あ、はい。これ」
鍵を渡された。
「それ寮のルームキー」
「ありがとうございました」
「えぇ。またね」
そう言って私は寮に向かう。
ちなみに部屋は１０２４室だった。
表札を確認。『シャルロット・デュノア』
うん。知らない。
ガチャ。
「うおぉ」

ドアを開けてみたのはとても寮とは思えない一室だった。
そこには金髪の少女がいた。
「えっと。どちら様でしょうか？」
「あ、すみません。今日からこの部屋に住むことになった織斑楓です」
「どうもご丁寧に。僕はキミのルームメイトのシャルロット・デュノアです」
「早速なんですがシャルロットさん。ベットはどちらをつかえば…」
「えっと。窓側を使ってくれるかな。僕の事はさんつけなくて良いから」
「わかった、シャルロット。私の事は楓でいいよ」
「わかった。楓」
さっそく荷解きを～。
「楓。手伝おうか？」
「うん。ありがとう。このダンボールの中の写真出してくれるかな」
「うん。分かった」
そう言ってシャルロットは写真を出す。
「！」
「どうしたの？」
「これって、楓と織斑先生と千夏と一夏？」
「そう。家族写真。一夏は私の弟ね」
「ええええええええええええ」
これはさすがにうるさい。
そんなに驚く事か？
コンコン。
「シャル。どうした？」
「いやちょっと…この写真が…」
入ってきたのは一夏と千夏だった。
「この写真ってまさか楓が来ているのか？」
「えっ…どこ？」

ガシッ。
「「イタイ。イタイ」」
私は2人にアイアンクローを喰らわせた。
「一夏。千夏。何ボケ咬ましてんだ？もう少しつ強くしてもらいたいか？」
「「イタイ。強くなってる止めて。」」
「さて問題です。目の前にいる人は？」
「「アイアンクローされていて前が見えません」」
仕方がないのでアイアンクローを止める。
「痛いよ楓姉。ボケぐらい分かってよ」
「悪かったな。千夏。それにしてもこの愚弟は」
「愚弟とは何だ、愚弟とは」
「一目見て姉の姿も分からないのは愚弟で十分だ」
「ん、な」
一夏が怒っている。
「楓姉。怒ってる？」
「ああ。俺の手でこのバカを叩きのめしたい気分だ」
「ちょ、落ちつて今度甘い物作ってあげるから」
「しょうがない許してやるか。一夏を」

その後一夏はケーキを作っていた。

5話（前書き）

取りあえず
織村→織斑に変更しました。
今回から…

5話

一夏と千夏あった。
友達？ができた。
今ＨＲ

「えっと織斑楓です。よろしくお願いします」
「それじゃあ席は１番後ろ窓側ね」
「はい」
今日は空が綺麗で何だか心が心地よい
「じゃあＨＲ終わり」
そんなんで私のＩＳ学園生活が始まった。

昼休み。
私は教室で弁当を食べようとしていた。
ザワザワ。
教室がうごめいている。
「お～い。楓～」
何だ一夏か。
「え、織斑君！何で三組なんかに」
こっちにきた。
「食堂行こうぜ」
「良いけど」
そう言って席を立つ。

「え、織斑さん織斑君と知り合い？」
「まさか許嫁！」
「そんな～」
「神は死んだ。私たちを裏切ったのよ～」
と女子がわめいている。
取りあえず弁当持って食堂に。
サクサク。
「食堂に箒いるかな？」
「いると思うぞ」
1分ほど経過。
「ここか…」
思わず立ち止まる。
色々と凄かった。
「ほら、立ち止まってないで行くぞ」
手首をつかまれ連れてかれる。
「ちょまて」
一夏はかまわずひっぱて行く。
「お～い。箒～」
ん。箒か。ずいぶんでかくなったな胸が。
箒もこちらにきずき
「遅いぞ一夏貴様は…って誰だその女は！」
「コイツはーーー」
一夏の口をふさぎ
「久しぶり。箒」
「誰だお前は」
「そう怒んないでくれ。はい。これ束ねさんからのメッセージ」
「！。姉さんが？」
そう言って私はケータイの録音機能で音を流す。
『箒ちゃんおひさ～。天才束ねさんだよ。あの用事があったら電話ちょうだい。ちなみにこれを流しているのはかっちゃんだよ。じゃ

あね～』
そんな事を言って終わる。
「まさか。お前、楓か？」
「そうだよ。シノン」
私が過去につけた箒のあだ名だ。
「本物だ…。久しぶり。楓」
どうやら分かったようだ。
「あの箒さん遅いじゃないです…か」
「あっ。セシリア」
誰だ？
「一夏さん。この女性は」
どうやらどこぞのお嬢様らしい。
「あ、すみません。私は織斑楓。よろしくね」
「ええ。こちらこそよろしくおねがいしますわ楓さん」
「あの。名前を名乗ってくれなか？」
「ええ。良いですわ一般庶民に名のるのも貴族の務め。あなたみたいな人ｎ－－－」

ブチン。

「え…何の音ですの？」
「まさか、これは…一夏」
「ああ。これは間違えない。楓が切れた」
「へ…」
「おい。そこのバカモノ。俺に喧嘩売ってんのか？」
「バカとは何ですの。弱い癖してその強気は！」
「じゃあ。ＩＳで戦うか？それなら分かりやすいだろ？」
「ええ。そうですわね。放課後第二アリーナで格の違い分からせてあげますわ」
「ああ。そうしよう。逃げるなよ？」

「あなたこそ逃げない事でしてよ」
弁当を持って帰る。
「おい何をやっている。静かに食事もできんのか」

一夏視点

姉さんが来た。
「いや。千冬姉。楓が帰ってきて…」
「何だ。もうきてたのか。挨拶ぐらいしーー」
「切れて。セシリアと戦う事になりました…」
「！」
千冬姉の顔が青くなる。
「オ、オルコット。まさかお前、楓を切れさせたのか？」
「ど、どうしたんですか？織斑先生」
「セシリア。誤りに行け。切れた楓には千冬姉でも勝てない」
「え…」
セシリアの顔が青くなる。
「オルコット。それは冗談でもなんでもない早く誤りに行け」
「ご、ご冗談を…」
あ～これはもう手遅れだな。

楓視点

放課後第二アリーナ
「ほう。よく逃げなかったな」
「え、あの。先ほどはすみませんでした」

フッ。
「何を言っているんだお前は？俺に格の違いを分からせるんだろ？」
「うっ」

３・・・２・・・１・・・

ゼロ

バンバン。
楓の銃がセシリアを襲う。
「うっ。うごけませんは！」
「お前のＩＳのエネルギー回路をいくつか壊した」

ザク。
セシリアに向かって剣を出し斬る。

『勝者、織斑楓』

「キャアアアアアア」
会場が煩い。
「おい、お前。俺は２割しか力を出していないぞ」
「う、う。本当にすみませんでした楓さん」
「名前を名乗れ今回だけは許してやる」
「セシリア・オルコットですわ」
「じゃあな」
そう言って俺はピットに戻る。
ＩＳを解除して着地。
「どうした。スッキリしたか？」
「少しは。甘い物が食べたい」

「そうだと思った。ほれ食堂のケーキだ」
そう言って渡されたのは5号位の箱に入ったケーキだった。
「ありがとう。姉さん」
そして寮に戻った。
部屋にはシャルロットがいた。
「ただいま。シャルロット」
「うん。楓おかえり」
「ケーキあるけど食べるか？」
「うんいただくよ。僕、紅茶用意するね」
「おねがい」

5話（後書き）

千夏…出番なかったですね…。

6話（前書き）

ふぅぅぅ。

最近朝に弱くなりました。

誤字。脱字。ツッコミ。よろしくおねがいします。

6話

現在私はシャルロットとケーキを食べている。
「突然だけど…楓は都市伝説の改心の赤神って知ってる？」
「ブッー。ケホゲホ、何でぞんなごとを」
何でそこで私の過去のあだ名が出てくんの？
「僕には2人日本にメール友達がいてその友達同士があっったらしくて、その片方の人にあって話したら改心の赤神って人だったらしいんだよね。ビックリしたのがその人が一夏だったって事。もう一人の人は女の人らしいんだ」
「そ、そうなんだー（棒読み）」
「それで、楓は知らない？」
「実は私も海外にメル友がいてさ」
「それがどうかしたの？」
話すしかないか…
「その人のペンネームが『シャル』なんだよね～」
「まさか…」
そう言ってケータイで素早くメールを打つ。
１０秒後。
♪～♪～。
私のケータイがなった。
「そのまさかみたいだよ？」
「嘘…『ミカン』？」
「正解ぽいですよ。一夏何でよりによってこのあだ名を出したんだ」
「楓…いやミカン。一つ言わせて」
「なに？シャル」
シャルロットをペンネームで言う。
「ありがとう」
「へ？」

何のことだ？
「ミカンがさ。メル友になっる少し前、僕は色んなことで精神状態が不安定だった。偶々やってみたｗｅｂで君に知り合った。それで会話を増やしていくごとに楽になっていった。楓はちょっとした僕の恩人だった。僕はあって見たいと思って色々と探してみた。そしたら一夏にあった。そんな時に楓が来たんだ」
「……」
「そして今分かった。ミカンが」
そうだったのか…。
「私なんかが支えになったなら良かった」
「うん…」
は～うっし。
「シャルロット。一つ頼みがあるんだけどいいか？」
「ん？僕にできることなら」
「じゃあ、私が1から作ったＩＳにのってみない？」
「へ？」
「私が束さんの所にいる時作ったＩＳなんだけど…」
「名前は？」
「『緋弾［スカーレット］』」
「じゃあ早速明日いいかい？」
「乗ってくれるの？」
「うん。何だかちょっと楽しそうだし」
「じゃあ、明日」
ちょっとご機嫌な楓だった。

6話（後書き）

ちょっとシリアスな感じどうでした？
自分ではうまく書けませんでした。

テヘッ☆

楓「作者男の癖に気もい」
作「がーん」
楓「それでは次回」
作「は～気もいって言われた…気も言って」

7話（前書き）

外が異様に暑い。

7話

んな訳でシャルロットにスカーレットに乗ってもらった。
「何？このＩＳ…」
「えっ。変だった？」
「そうゆうわけじゃなくて、自分の思ったと通りに動く…」
「なら良かった。コアから作ったかいがあった」
「コアからって？」
「決まってるでしょ。私が作ったんだ」
「えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
煩い。
「だってＩＳのコアって篠ノ之博士しか作れないんじゃあ？」
「束さんに教えてもらったんだ。そのせいで色々と苦労したけどね」
例えば、束さんと一緒にロシアに言って国家代表を倒しちゃうとか…。
そのせいで常にカツラとカラーコンタクトとメガネを…。
「す、凄い。そしてその技術が！」
「申し訳ないんだが半分暇つぶしで作ったんだ」
「そ、そうなの？」
「よかったらそのＩＳ使ってくれないか？」
「えっ。いいの僕なんかが！」
「うん。シャルロットがよければ」
「ありがたく使わせてもらうね」

アリーナ更衣室。
「シャルロット。私部屋のシャワー使わせてもらうね」
「ここのは使わないの？」

「ちょっとね…。つうことでじゃあ」
このオレンジの地毛は見られたくないからね。

視点シャルロット。
「何か変だったな楓」
あっ。
「部屋のシャワーのリンス切れてたんだった」
シャルロットは急いで寮の部屋に向かう。
3分後。
到着。部屋を見るが誰もいない。
「楓はシャワーかな？早く渡さないと」
ガチャ。
脱衣所のドアを開ける。
「……どちら様？」
そこにはタオルで体を拭いている赤に近いオレンジの髪の綺麗な少女がいた。
よく考えれば僕も一夏と同じような事があった。
「あ…シャルロット？早くでてくんないかな？」
「あっはい」
バタン。
さっきの人は誰だったんだろうか。
楓ではなさそうだ。そもそも楓は髪が黒で短い。けれどさっきの人はオレンジの髪が腰のあたりまであった。
目の色は
ガチャ。
「シャルロット私が誰だか分かる？」
「いいえ」
「私だ。織斑楓だ」

「へ？」
イマナンテ？
「だから、私だ楓だ。そしてこれは地毛だ」
「本当に？」
「そうだ。何時もはカラーコンタクトとカツラを付けている」
「どうしてそんな事を？」
「ちょっと昔ロシアの国家代表を倒しちゃったんだよ」
「えっ。国家代表！？」
「そ」
「凄いことだよ」
色々とその人に仕返しされるのがちょっと怖くてな。
「まぁ。ばれちゃったからこのままでいるさ」
「変なことを聞くけど、それじゃあ都市伝説の名前の改心の赤神の意味って」
「この髪だろうよ」
「じゃあ、改心って？」
「近所の不良どもを倒して真面目にさせ言ったのが事の発端だ」
「何でそんな事を？」
「私が不良に絡まれた時さ実知らぬ男子が助けてくれてさ、もうこんな絡まれる事がないようにってね」
「そうだったんだ…」
コンコン
「シャルロット～、楓姉～。食堂にいこ～」
この声は千夏だ。
「分かった今行く」
そう言ってズラ、コンタクトを付ける。
「あれ、隠さないんじゃぁ」
「明日から。急だと凄く驚くでしょ」
「そうだね」

7話（後書き）

作「どうだった？」
楓「……」
一夏「……」
作「何か反応して！」

8話（前書き）

外が薄暗いもうすぐ秋だ。

8話

翌朝
「おはよ～う」
「おはよう。織斑さ…ん？」
「何だ？私の顔に何かついてるか？」
昨日の予告どうりズラとカラーコンタクトを止めた。
だけどメガネあり。
「いや…髪が…」
「ん？アレはカツラだ。目にはカラーコンタクト付けてたし」
「そ、そうなんだ」
席に着くと隣の席の…誰だっけ？が声をかけてきた。
「えっと…。名前なんだっけ？」
「私の名前は霧島青葉。まあ、覚えてない？」
ん？誰だっけ…元クラスメートか？
「貴女に改心させられた1人。元クラスメート」
「ん…あえっと確か『ブラット』のヘッドだっけ？」
「正解。まあよろしく」
「もしかして…最初きずかなかった？」
「ＹＥＳ。学年主席＋一夏の姉…あってるよな」
にこやかに言わないで。
「あってる。確か貴女が私が最後に改心させた人だったと思う」
「まあ。よろしく。ついでにこのクラスの代表をやっている。」
「よろしく、青葉」

昼休み。
「大変だよ。一組にまた転校生が来た。名前は橘葵。美形の男子」

「え～だ、だ、だ、男子～。しかも二人目！」
橘？しかも男子か…。ってどんだけ噛んでんの？
「青葉～。よかったら屋上で昼ごはん食べない？」
「いいよ。楓。行こう」
「どうせ込んでるだろうし転校生目当てに」
「そうだね」
そんな訳で私は人ごみが好きでは無いので適当に青葉を誘って屋上に行った。

屋上
「やっぱすいてるね～」
「早くご飯食べよ」
「ん？誰かいる」
何処だ～。
ん。一夏と男子と千夏がいる。
おそらく転校生だろ。
「お～い。一夏～。千夏～」
おっ。反応した。
だが誰？って感じになっている。
「青葉一緒にいいだろ？」
「う、うん。いいけど」
近くに行く。
「か、楓姉。どうしたのその髪もっどているけど」
「カツラをとった。ってその人は噂の転校生？」
そこには赤に近いオレンジの髪の男がいた。
「どうも、こんにちは。橘葵です。夢は5歳の時に生き別れになった。双子の姉を見つけることです」
あ…たぶん私だ。

「よ、よろしく。私は織斑楓その二人の義姉。いわゆる、捨て子。こっちは青葉」
「ど、どうも。私は霧島青葉。よろしく」
どう反応する転校生。
「変なこと聞きますが貴女は昔の名字知ってますか？」
「うっすらね。ちなみに『橘』だった。ついでに五歳の時に捨てられた」
正直この雰囲気苦手だ。
「誕生日は？」
「これ以上個人じょうーーー」
「9月27日」
おい、一夏。
「多分確定だと思います。姉さん」
エーーーーーーー。
「一つ言っておくけど。私には5歳より下の記憶が無い」
転生者だし。
「姉さんそれでもいい。今ではたった一人の肉親なんだから」
「親は？」
「姉さんを捨てた事をこうかいしていてその3日後無くなった」
私は何も言わずに葵を抱いた。
泣いている彼を。
「私は橘に戻るつもりは無い。織斑のままいる。でも肉親なんだから仲良くしような」
「うん。姉さん」
その後感動の再開？をした後30秒程抱いた。
「楓姉。早くしないと昼ごはん食べられないよ？」
「あ…」

8話（後書き）

最近ツイッターやてっています。

@takanon3

9話（前書き）

最近更新が不定期だな～。

9話

ＨＲ
「え～。忘れてたんだけど来週の火曜から臨海学校ね～。以上」
え…何それ。
つうか立ち去るの早。

昼休み。
「は～」
嫌になる。
海はこの世で3番目に好きだがちょっと嫌いだ。
ザワザワ。
「お～い。織斑さ～ん」
声をかけられた先には葵がいた。
「何しにきたんだ葵。私は昼ご飯を屋上で取りたいんだ。私を誘うんだったらコイツを誘え」
と近くにいた確か野田？さんを差し出す。
「えっ。私？」
「じゃよろしく野田さん」
そして素早くたち去る。
中庭に移動する。
えっ。屋上に行くんじゃないかって？
そうしたら葵が追いかけてくるだろ。
ランチタイム開始。
今日は簡単な鳥飯。
１７分で食べ終わる。
昼寝を開始しようと思ったら誰かが来た。
「キミは織斑楓さんだよね」

「はい。そうですけど。生徒会長さん」
そこにいたのは生徒会長　更識楯無が声をかけていた。
「お堅いな～。私の呼び方は楯無にしなさい」
「それでどうしたんですか？」
「放課後。生徒会室に来てくれるかな」
「いいとも～（いい●も風）」
「あら、貴女意外とノリがいいのね」
「ええ。まあ」

放課後。
私は今生徒会室に居る。
「で。早速なんだけど。私と戦いなさい」
「リベンジですか？」
「ええ」
「嫌です。臨海学校の準備があるので」

「なら私も手伝うわ」

「へっ？」

１０話（前書き）

遅くなってマジすんません。

１０話

日曜日。
俺は駅前のショッピングモールに会長といた。
急にあんなことを言われたと思ったらこんな感じで一緒に買い物中である。
会長曰く『やっぱり親睦を深めないとね～』だそうだ。
仲良くなった記憶は俺には無い！

「ほらほら行きましょうよ。折角仕事をサｂ…買い物にきたのに♪」
うん。さっきバッチリ本音出ちゃったよね。
これって会長の口実じゃん。
「はあ。水着は買う気ありませんよ」
「まさか貴女。旧・スク水で攻めるなんてマニアックね」
「違います。泳ぎたくないんです」
「勿体無いわよこんな良いスタイルしているのに」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0990w/

ＩＳ《思い》

2011年10月22日23時39分発行